Sport Godzilla®

スポーツゴジラ®

第41号

特集 社会貢献とボランティア

無料

スポーツくじ

toto FOR ALL SPORTS OF JAPAN

BIG

スポーツ振興くじ助成事業

スポーツゴジラ®

〔第41号〕

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が商標使用の許諾を受け、スポーツネットワークジャパンが発行しています。

2 第41号を発刊するにあたり

■特集■
社会貢献とボランティア

4 奇跡のボランティア 尾畠春夫さんの今 — 取材・写真 長田 渚左

16 2008年北京オリンピック最強のレガシー — 藤原 庸介

22 ボランティアを歴史的に考える —— 菊 幸一 — 取材・構成 西本 祥子 長田 渚左

26 「ロベルト・クレメンテ賞」を知っていますか？ — 川本 凜太郎

31 日本のアスリートの社会貢献 王貞治・小笠原満男・高橋尚子・長谷部誠 — 波多野 圭吾

37 第9回日本スポーツ学会大賞 受賞記念講演 —— 猪谷 千春 — 構成 阿部 雄輔

47 夢劇場『馬』No.14「二刀流」 — 長田 渚左

48 バックナンバーのご案内

【表紙イラスト】南 伸坊

スポーツネットワークジャパンHP　http://sportsnetworkjapan.com/

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第41号を発刊するにあたり

編集長　長田 渚左

近年、日本で『社会貢献』や『ボランティア』という言葉を日常的に耳にするようになった。今秋、２０２０年東京オリンピック・パラリンピックの大会ボランティアが募集され、目標の人数を超えた。一方、その過程で若者を中心にさまざまな意見が噴出したことで、日本人はボランティアの本質を理解できているのだろうか？　という疑問が私自身にも出てきた。そこで今年10月、ボランティアの意義、真髄について、第一人者でもある尾畠春夫さんを何としても取材したいと思い立った。

８月に山口県内で2歳男児が行方不明になり、延べ５５０人の捜索でも発見できなかったが、３日目に大分県から駆けつけた尾畠さんが、捜索開始からわずか30分で男児を見つけだし、日本中を驚かせた。今年の流行語大賞にもノミネートされた『スーパーボランティア』は、この尾畠さんにつけられたものだった。

自宅のある大分県日出町を直接訪ねると、彼は憔悴し切って「取材はお断り」と話した。ボランティアも中断していた。予想外だった。何が彼を傷つけ、苦しめているのか。それを聞いているうちに、少しずつ心を開いてくれて「スポーツゴジラになら書いていいです」と許可をいただいた。

その時の取材をもとに、尾畠さんの崇高な活動の原動力と原点についてまとめてみました。筑波大の菊幸一教授の歴史的な考察と合わせて読んでいただけると『ボランティア』への理解が深まると思います。また、２０１０年の14号に掲載した社会貢献活動に尽力して亡くなった元大リーガーのロベルト・クレメンテの記事も再録しました。

尾畠さんが再び、気持ち良く日本中を飛び回っていただけるよう祈りながら41号を刊行します。

『スポーツゴジラ』第41号
ご協賛およびご協力企業・団体

株式会社トンボ

WOWOW

Hakuju
白寿生科学研究所

株式会社御福餅本家

人と社会を支える力
国士舘大学
Kokushikan

文藝春秋

Eat Well, Live Well.
AJINOMOTO

PHOTO KISHIMOTO

上月財団

ヤマト運輸

立ちどまらない保険。
MS&AD
三井住友海上

BS11
日本BS放送

日本体育大学

JAPAN SPORT
COUNCIL

都市に豊かさと潤いを
三井不動産

株式会社東美物流

日本ハンドボールリーグ機構

TOKO 東江テクニカ

笹川スポーツ財団
SASAKAWA SPORTS FOUNDATION

（順不同）

奇跡のボランティア 尾畠春夫さんの今

取材・写真　長田 渚左

今年8月、山口県周防大島町で行方不明になっていた2歳男児が、3日ぶりに無事保護されたニュースは、安堵（あんど）とともに驚きを持って伝えられた。
地元の警察と消防が延べ550人を動員して2日間にわたり捜索したが発見できなかった。それが絶望感も漂いはじめた3日目、大分県から駆けつけたボランティアの尾畠春夫さんが、捜索を始めてわずか30分で藤本理稀ちゃんを見つけたのだ。その洞察力は〝神業〟とたたえられ、男児の家族からのお礼の食事などもきっぱり断るなど、ボランティアの鏡ともいうべき態度などから〝スーパーボランティア〟と評された。
実はこの人、被災地などでのボランティア活動で〝達人〟〝師匠〟と呼ばれる有名人だった。男児の発見は偶発的なものではなく、実は豊富な経験に裏打ちされたものだった。あれから数ヶ月。尾畠さんのボランティア人生ついて話を聞きたいと思い、大分県日出町の自宅を訪ねた。

今回の特集「ボランティアと社会貢献」を企画するにあたり、どうしても尾畠さんにお会いしたいと思った。しかし、コンタクトを取ることは想像以上に困難を極めた。まず彼は携帯電話を持っていない。しかも一人住まいなので、アポイントを取るには直接自宅に出向くしかない。ただ被災地でのボランティア活動で、不在の可能性も高い。門に書き置きが貼られていることもあるが、帰宅は10日後なのか1カ月後なのかは不明。地元の新聞社でもその動向はつかめないという。

八方手を尽くして、何とか自宅の住所は探し出した。だが、取材依頼の手紙を出したものの、ついに返事はこなかった。もはや運を天に任せて、江戸時代のように直接訪ねるしか手はない。10月半ば、ダメもとで大分行きの覚悟を決めた。

大分空港からタクシーで別府湾に沿って南へ30分。日出町の尾畠さんの自宅前に到着した。門には鍵がかかっていた。呼び鈴やインターホンはない。ただ脇のガレージにはテレビでよく見た〝復興〟のステッカーがいっぱい貼られた軽ワゴン車が停まっていた。不在のようだが、遠出はしていないようだ。会えるかもしれない……。門の前で待たせていただくことにした。

午後1時を少し過ぎていた。周辺の家からは掃除機やテレビの音が聞こえてきた、尾畠家にはまったく人の気配がない。日は中天にあり、晴天なのに洗濯物を干しているでもなく、シーンと静まり返ったまま。隣の家の塀に取り付けられたいくつもの風車が、カラカラと音を立てていた。上空にはトンビが舞っている。周囲の道は犬を散歩させる人が通るだけである。のどかな風情の中、尾畠さんの帰りを待った。しみじみ待った。時々、家の塀の中をのぞいてみるが、何の変化もない。それでも待ち続けた。

やがて冷たい風が吹き始め、陽が傾き始めた。秋の日はつるべ落とし……急に心細くなってきた。ひょっとしたら今夜は帰宅しないのかもしれない。西

の空でカラスが騒ぎ始めた。近所の家を訪ねて尾畠さんの様子を聞き回ってみようか。日が暮れる前に最寄り駅まで歩かないと、宿泊予定地の大分市内まで帰れない。〝まずいことになってきた〟と思ったときだった。尾畠家の玄関脇のガラス戸が、ガラガラガラと大きな音を立てて開いた。「尾畠さん！」。私は跳び上がって門の上に顔を出して叫んだ。すると彼も私を見つけて言った。

「どちらさんですか？」

私は慌てて名を名乗り、取材依頼を出したことを手短に伝えて、東京から会いに来たことを説明した。

「へぇ、東京から来て、ここでずっと待っていたの？　いつから？　じゃあ3時間もここにいたんだ。そりゃ悪かったですね。でも、もう取材は受けないことにしたんです」

――はあ、それはネットなどでいろいろと書かれたりしたからですか？

「うーん、それもあるかもしれないけど、面と向かって信じられないことを言われたり、私の本を出版したいという連絡が複数の会社からあって、出したくないと言っているのに、しつこく訪ねてきて、強引に出版すると言うから、訴えますという話にまでなったんですよ。友達だと思っていた人や顔見知り、金バッジを付けたような人からも信じられないことを言われたり、〝次は自分も2歳児を捜し出して英雄になる〟などと言う人もいた。もういやでね。だから10月11日に79歳の誕生日を迎えてから、取材を受けないことにしたんですよ」

――つまり尾畠さんはいつもと同じボランティア精神で行動しただけなのに、2歳児を奇跡的に発見して世の中の脚光を浴びたことで、周囲にねたみ、そねみ、ひがみが噴出したということですか？

「うん、そうとも言えるね。傷つくよね。一生懸命に泥をひっくり返してきただけだから。他の人ではなく、いつも自分とだけ向き合ってきた。尾畠春夫、いいか、今日はこれとこれ、この5つまでをメドに

やれ！　と自分にハッパをかけて、５つのつもりが６つまでできたら〝よくやったよ春夫〟と自分を誉めてね。でも４つまでしか到達できなかった日は〝明日はもっとやらなきゃ〟と自分で自分を責める。毎日、歯を食いしばってスコップを握ってやってきた。それだけなのに〝ボランティアは金になるのか〟〝テレビに出て稼いだだろ〟とか言われて、冗談じゃない。反論する気も起きないですよ。月に５万５０００円の年金だけですよ。生活は苦しいけど、俺は何ももらってなんかいない。お天道様に顔向けできないこと、後ろに手が回るようなことは一度たりともやらずに生きてきたのに……あーでもない、こーでもないと言われて……人生初めての経験。辛くてね。ノイローゼだね。この一週間、夜がぜんぜん眠れない。朝は毎日８㎞走っています。この間は一昼夜かけて１００㎞歩いた。体は疲れているはずなのに眠れない。だからもういやなんです」

思わぬ尾畠さんの状況に私も大いに戸惑った。話題を変えることにした。

習性と呼び名

――８月の理稀（よしき）ちゃんの発見には日本中の人々がホッとしました。

「そうね。よし君のお母さんの顔は忘れられないね。お母さん、辛くて辛くてどうにもならなかったのでしょう。生きて会えるとは思っていなかったと言ったからね。顔色がね、こんな色（近くにあった黄緑色の木の葉を指さし）だった。こんな色の顔を見たことがなかったですよ。人間の限界を超えた顔色をしとった。それで泣きながら駆け寄ってこられた。ああいう時の顔はいいよね。あの顔を見て、それだけで幸せでした。生命は何よりも重い。尊い命が助かって本当に良かったと思ったです」

――行方不明になって68時間。２歳の幼児なので生存の可能性は低いと思われていました。なぜ尾畠さんは捜索を始めてわずか30分ほどで発見することが

できたのですか？

「子供の習性として、まず下には降りていかないのね。上に登ってゆくから。子供の気持ちになって、よしクーン、よしクーンと大声で呼びながら歩いたんですよ。すると沢のところから『僕、ここ』と小さな声で返事がした」

尾畠さんは発見前日、自宅のテレビで子供が行方不明になっているというニュースを見るやいなや、捜しにゆくことを決めた。大分県から夜通し軽ワゴン車を運転し、早朝に山口県周防大島町に到着。その足で2歳児の曽祖父宅を直接訪れた。子供の風貌や特徴を聞き、周囲からいつも『よし君』と呼ばれていたことを頭にたたき込むと、一人で山へ捜しに向かった。

奇跡的な救出劇は、しかし、決して偶然ではなく、豊富な経験の裏付けがあってのことだった。幼児にとって、いつも親しい人から自分が何と呼ばれているかは最重要だったかもしれない。例えば『よしき君』『藤本君』と呼ばれても、たった一人で闇夜を過ごし、体力も落ちている中、自分から声を発することはなかったかもしれない。尾畠さんは背中のリュックの中に針と糸を入れていた。もし幼児が大きなケガをしていたら、その場で傷を縫い合わせるという非常時にも備えていたのである。

8月15日、理稀くんを発見した後、軽ワゴン車を6時間運転して、翌16日未明に大分県日出町の自宅に戻ると、家の前にテレビ局、新聞社、出版社の車がズラリと20台も横付けされていたという。

「近所にも大迷惑でしたよ。一台に2人としても40人ですよ。家の中が人であふれて、ぎゅうぎゅうのすし詰め状態。身動きできないような状況で取材を受け続けました。一生懸命に質問に答えたつもりなのに、いろんな書き方をされました。私は読んでいないけど、周りの人から、あんなこと書かれていた、こんなこと書かれていたと言われて呆れてしまった。もう取材はいやだと思いました」

――尾畠さん、ちょっと待ってください。私は東京で尾畠さんのことについて書かれた新聞や雑誌はすべて目を通してきました。ここに12種類の記事のコピーも持ってきましたが、尾畠さんのことを悪く書いている記事は一つもありませんよ。きちんと取材をして誠実に書かれています。もし尾畠さんの耳に他の人からの悪口、誹謗中傷が聞こえたとすれば、テレビを見たり、新聞や週刊誌を読んだ人によるネットへの勝手な匿名の書き込みではないでしょうか。尾畠さんの気持ちは分かりますが、すべてを一緒にしてしまうのはとても寂しいです。

「（腕を組んで、うーんとうなって）確かにそうかもしれないけど、面と向かって言ってくる人もいるんです。本当にもういやでね」

1939年（昭14）10月11日、尾畠春夫さんは7人兄弟の4番目として大分県国東市で生まれた。父は下駄職人だったが、時代の流れで履き物はゴム製品に変わり、家業は傾いていった。小学5年生のときに母が亡くなり、農家に丁稚奉公に出された。文字通り、食うや食わずの時代だった。

「母は41歳で他界しました。栄養失調でした。奉公に出た農家では畑仕事もしましたが、馬の世話もやりました。馬の食べるカイバの中にカボチャやイモを小さく切って混ぜるのですが、それをワラを払って食って、飢えをしのいでいました」

中学を卒業して大分県別府市の鮮魚店で基礎を3年学び、その後は山口県下関市のフグ料理店で修行を3年、次に神戸の鮮魚店でも3年働いた。東京にいた兄の勧めで、東京・大森でとび職の仕事をして資金を貯め、地元大分に戻ると別府で念願の鮮魚店『魚春』を開店した。29歳だった。地元で愛され「一度も赤字を出さず」（尾畠さん）に繁盛したが、65歳の誕生日に突然『魚春』を閉じた。大勢の常連客は面食らったが、15歳で働き始め、働くのは65歳までと決めていたという。閉店の挨拶でお得意さんを

回ると「今まで魚春の魚しか食べてこなかったのに、これからどうすればいいのか」と、心底から寂しがられた。

「魚屋ひとつが、ここまで愛されていたのかという気持ちで、本当にありがたいと思ったですよ。店があればこそ、2人の子供も人並みに育てて学校にも行かせられた。その恩も合わせて返したいと強く思うようになったんです」

感謝とお赤飯

実は鮮魚店の経営をやめてからボランティアを始めたのではなかった。

「誰かが困っていると思うと、手伝いたい、手助けしたいと思う。それは人間として当然のこと」と話しながら、尾畠さんは昔のことを振り返った。

「40歳の頃から登山が好きになって、地元の由布岳にも何度も登ってきた。いい空気を吸わしてもらって、いい眺めを見せてもらって、自然の素晴らしさを教えてくれる山にも恩返しをしたいという思いが強くなった。崩れかけた路肩を修理したり、案内板を整備したりするようになった。山開きのときには登るのに杖があった方がいいから、竹でこさえて置くようにしたんです」

２００４年、新潟県中越地震の被災地でボランティア活動に参加すると、力仕事の実力は群を抜いていた。65歳で鮮魚店を畳むと、06年には日本列島を徒歩で縦断する一人旅に出た。そのときの出会いが、その後のボランティア活動に徹底して向かう引き金になった。

「その日は南三陸の浜にテントを張って野宿しようとしていたんですね。すると近所の方が『孫の誕生日でおこわを炊いたから食べてくれませんか？』と、温かい赤飯を山盛り持ってきてくれたんです。初対面で見ず知らずのオヤジにどうして？　と思うほどうれしいご親切をいただいたんです。人間の情を感じて、心の底まで温めてもらったようなおこわだっ

たんです」

11年3月、東日本大震災のニュースを自宅のテレビで見て、南三陸の映像に背筋を凍らせた。

「津波で見る影もなく町が破壊されていて、電話をしても通じない。あのおこわをくださった南三陸の方が心配で心配で」

米や食品、ガスボンベなどを軽ワゴン車に積めるだけ積んで、南三陸へ車を走らせた。そして、現地でおこわをくれたMさんを捜し出して、持参してきた物を渡した。生きていて良かったと、お互いに涙が止まらなかったという。

その後、せっかく訪れたのだからと、現地で復旧作業を手伝い、それを機に南三陸で延べ５００日もボランティア活動に参加した。

尾畠さんのボランティアのモットーは「自己完結、自己責任、たとえケガをしても自己責任」という厳しい姿勢だ。しかもボランティア先からは何ひとつ受け取らない。

「１００人分の炊きだしがあっても、それは被災された人のための分なんです。ボランティアがそれを食べれば、被災者にその分が回らなくなるんです。もし避難所にボランティアが寝れば、被災者が寝るスペースが減るだけなんです」

だからどこへ行っても持参したレトルトパックのご飯に水をかけ、梅干しをのせて食べ、夜は自分の車の中で寝て、翌日の作業に備える。

トレードマークの赤い鉢巻き、派手な色のつなぎ服にも意味がある。

「地味な色だと人は元気が出ない。いろいろ試してみたが、赤い鉢巻きをしていると、人は声をかけやすいです。あまり言いたくないけど被災地には泥棒も出るんです。だから赤い鉢巻きで目立つようにして、怪しい人間じゃないというイメージで安心感を発しているんです」

だんだん尾畠さんの表情も和らいできたように思ったので、一番聞きたいことへ話を向けた。

――尾畠さんは本物だと思って東京から訪ねてきました。私はスポーツの世界の人間を伝える仕事を30年以上してきました。人生で八方塞がりでどうにもならず、生きていけないのではないかと思っていたときに、ボクシングの試合を見て生きるエネルギーをもらいました。スポーツに助けてもらったという思いが強く、勝敗を超えたスポーツの魅力を伝えて恩返しがしたいと思って、苦労も多いのですが、無料のスポーツ総合誌「スポーツゴジラ」を発行しています。そんな経緯もあって尾畠さんのボランティア人生に魂を感じました。被災地は決してきれい事では済まされない、臭気や埃、時には危険が伴う作業も少なくないはずです。どうして1年の3分の1もの間、一銭にもならないボランティアに力を注がれるのかお聞きしたいと思って、ここで待っていたのです。

「姉さんもそんなことがあったんだね」

尾畠さんは遠くを見るような目をして沈黙し、やがて鼻のあたりにシワを寄せて話し始めた。

「お母さんのオッパイをいっぱい飲んだからだったんじゃないかなあ。母は41歳で亡くなりました。栄養失調だったですよ」

――ボランティア活動をしていると、お母さんを思い出されることがあるのですか？

「うーん、あるねえ。オヤジにはそんなこと思わないけど、母親には今でも会いたいなあと思う」

――一日中、身を粉にして泥にまみれて働いた後、亡くなられたお母さんと対話する。尾畠さんのその日の働きっぷりを天から見ていてくれるような気がするのですか？

「……そうね、浮かぶね」

昨日まで、ごく当たり前にあった日常の平和がひっくり返る。家屋はもとより、家財や家族までもが失われてしまった現実。悲嘆に暮れる人々の傍らに寄り添って、自分にできる精いっぱいに心を配る尾

畠さんには、何か覚悟のようなものがにじむ。

「（ボランティアの）中には困った人もいるんですよ。白いスニーカーで来たから泥の中には入れないとか、仲間で盛り上がってガレキの前で記念写真を撮ったり……。あとね、一番まずいと思うのは亡くなった家族の様子を根掘り葉掘り聞く人がいるんです。怖かったか？　辛かったか？　苦しかったか？　家は、家族は……それを聞かれて快く思う人はいないということが分からない。私は被災された人には２つのことしか言いません。『おケガはなかったですか』『私にできることなら何でもお手伝いさせてください』。やらせていただくのだという気持ちです。ボランティア先で熱中症や病気になれば、被災地に迷惑をかけます。ケガをしないように、健康は自分で守らなくてはいけない。私はそう思っています」

日本中が注目した2歳児救出は、尾畠さんにとっては長いボランティア人生の中の一コマに過ぎなかった。それなのに売名行為だの、有名になろうとしているなどのいわれのない誹謗中傷にさらされ、心を深く傷つけられた。

「反論する気などはないです。ですが今はボランティアに行ける気分じゃない。何でそんなことを言われるのか。何で根も葉もないことを言うのか。頭の中で言葉がぐるぐる回ってる。トゲのある言葉が刺さったまま。そんな状態でボランティアはできない。少しでも手助けしたい、そう思ってボランティアをしてきた。この辺でも草や木が伸びて困っていると聞くと、すぐに行ってやるんです。お礼はどうしましょうと言うから、一切いらないと言います。困っている人がいたら、手助けしたいというのは当然のことでしょう。後から気遣ってビールを持ってきてくれたりしたけど、それは息子にあげました。私は２０１１年3月11日の東日本大震災で被災した南三陸の人たちの仮設住宅がなくなるまで、酒は飲まな

いと決めているんです」

尾畠さんは深くふぅーとため息をついて、首をかしげて続けた。

「日本はどこかおかしくなっていませんかね。引きこもりや自殺者も多い。それに驚いたけど建物の耐震の数値改ざんが１０００件？　……信じられないですよ。世の中にはついてはならないウソがあることが分からないのか。なぜそういうことが分からないのか。私は全然分からないですよ。今はボランティアには行かれない気分なんです。いろいろ言われて刺さったままな感じなんです。ノイローゼだね。今まで自分は弱いほうだと思っていなかったけど、今回は初めての経験でね。またボランティアに行けるようになるのは1年先か2年先か分からないけど、そうなったら由布岳へ、姉さんを案内しますよ。素晴らしい自然がありますから」

ようやく尾畠さんがトレードマークの大きな白い歯を見せた。印象的な尾畠さんの笑顔と白い歯だと告げると、彼は右手を口の中に入れて、ガガッと上あごを外した。

「これは入れ歯なんですよ。19歳のときに1本1本次々抜けた。全部入れ歯なんです」

ええっー。思わず声を上げてしまった。70歳や80歳の人生の晩年ではなく、19歳という成長期に歯が抜けてしまう。昭和14年生まれ。戦中、戦後の激動の時代を生き抜いた人なのだと、あらためて感じさせられた。被災地の人の苦しさや無念、命の重さを身をもって分かるからこそ、手助けをしたいと考える。

「被災地だけでなく、今年ほど日本に天災の多かった年はなかったでしょう。大雨、台風……日本中が水であふれ、家が流され、家族が流され、少しでも（自分が）お役に立てればと思っていたんです。それだけだったんですよ。でもね、傷ついたね……」

心ない人はどこにでもいます。心から尾畠さんの生き方に拍手を送り、尾畠さんのようになりたいと憧れる人も全国にいますから……。どうぞつまらない言葉に耳を貸さないで下さいと精いっぱいの気持ちを口にした。

尾畠さんはあらためて「うん、うん……」とうなずき「3時間も待たせて悪かったね」と小さな声で言うと「スコップ握ってるから豆だらけだけど」と言いながら握手を求めてきた。触れたことのない手だった。サボテンのように分厚く、ゴワゴワしていた。

「この手がスコップを恋しくなることがありますよね！」と念を押すと、尾畠さんはもう一度、こう繰り返した。

「……1年先か、2年先か、それは私にも分からない……」

バイクや軽ワゴン車には願いを込めた“よみがえれ南三陸!”のステッカーが貼られている。

社会貢献とボランティア

2008年 北京オリンピック最強のレガシー

藤原 庸介

北京オリンピックのボランティアは10万人。そのほとんどは市内の大学の学生たちだった。中国では学生の寮住まいなので、彼らは大学から担当する競技会場まで毎日通っていた。中には片道1時間半もかけて通う学生もいた。

私は、北京市政府の直轄機関である組織委の関連会社の部長として、北京の放送センター（ＩＢＣ）やプレスセンター（ＭＰＣ）で働くボランティアの事前研修を担当した。ＩＢＣやＭＰＣは2万人近い外国メディアが働く情報発信の拠点である。ここで働くボランティアが英語の能力が低かったり何か失敗すれば中国の恥を世界に報道されることになるのではないかと組織委は恐れていた。そこで胡錦濤前総書記が卒業した清華大学という中国で最高峰といわれる大学の学生たちを充てることにし、その中でも学業優秀かつ英語のよくできる者しか採用しないという厳しい選抜を行った。

藤原 庸介（ふじわら・ようすけ） 1953（昭28）年、東京都世田谷区出身。1976年東京大学経済学部卒業。日本放送協会（ＮＨＫ）入社。報道局外信部記者 ローマ支局長 アトランタ支局長、報道局スポーツ・チーフプロデューサー・1996年～2004年 国際オリンピック委員会 ラジオ・テレビ委員会委員。2005年 ＮＨＫ退職。2005年～2008年 中国北京市政府外郭団体 北京奥林匹克轉播有限公司（北京オリンピック放送機構）放送情報部長。2008年～2009年 2016年東京五輪招致委員会事業・広報担当委員。流通経済大学准教授、日本オリンピック委員会理事、全日本柔道連盟理事。

中国ルールと国際ルール

中国では学生はエリートであり知識人としての階級意識が強い。特に清華大学の学生たちは卒業すればすぐに政府や党の幹部になっていくため、中国13億人のトップ中のトップだと思っている。従って彼らは普段は肉体労働などやらないしアルバイトもしない。そういう学生たちに私が伝えたのは次のようなことだ。

まず、中国で一番のエリートだという意識を捨てなければボランティアはできないということである。雨の中で交通整理をしたり、農村からの出稼ぎ労働者と一緒に重い荷物を運んだり、床が汚れていたら拭いたりするのもボランティアの仕事だ。「私は清華大学の学生ですから、そんなことはやりませんできませんという人がいれば、今すぐ辞めてください」と言うと学生たちは静まり返ってしまった。

中国の組織では、「ほかの国ではこういうやり方をしているから、これをやってみよう」と言っても、「いや、ここは中国だから、そんなことはできない」という答えが返ってくることが多い。北京市や組織委員会の会議でも、「ここは中国だから」という理由で何度も私の提案がすげなく却下された。こういう点は日本の組織以上に保守的だとも言えるが、翻ってみれば数千年も東アジアの文化の中心だった国だけに、常に自らがオリジナルなものをまず生み出すべきだという矜持もその背景にあると思う。

これを防ぐために学生たちにはサッカーの国際試合を例えに挙げて説明した。オリンピックを自分の国で開くということは、つまり国際ルールにのって試合をするのと同じだ。線審がオフサイドを宣言した時に、ここは中国だからオフサイドではないと言ってはいけない。そう言うくらいなら、そもそも中国ではオリンピックを開催すべきではないという原則論から始めた。

次は時間の観念だ。中国では待ち合わせに遅れる

のはごく当たり前で、よく言えば寛容なのだが時間にルーズなところがある。学生には、放送や新聞は時には1分を争って時間との勝負で仕事をしており、世の中には1分の遅れでも意味がなくなってしまう仕事もあるのだということを伝えた。

一歩下がると一歩出る

中国人と日本人に共通するのは、白人の外国人に対して一歩引いてしまうところだ。これについては、自らがルールをよく理解し、外国人からそれに反することを求められても物おじせずに対応するよう求めた。プレスセンターでは外国の記者のサポートをするのがボランティアの仕事だ。できる限り助けてあげることは必要だが、ルールに反する要求は相手の肌の色や態度にかかわらず妥協せずに断ること、ただその時には丁寧ににこやかに断るよう伝えた。

また、この仕事は自分がやるべきか、誰か他の人がやってくれるだろうかと迷った時には、一歩下がるのではなくて一歩前に出ること。オリンピックの運営では誰の責任範囲ともいえないいわばグレーゾーンの仕事が山のようにのこってゆく。責任分担が明確でない手つかずの仕事といつも向き合っていることになる。そういう時には一歩前へ出て自らがそれを処理することが最も大切だと教えた。

２００８年８月８日にオリンピックが始まると、清華大学の学生たちはそれぞれの持ち場へ散って行った。彼らはプレスセンターで重い段ボール箱を運び、雨の中で入館検査をし、手間のかかる競技結果の分類や配布などの作業をこなした。屋外で仕事をする学生たちは日焼けするにつれてたくましくなっていった。もともと選り抜きの学生だけに仕事を覚えるのは速い。要領をつかむと警察官や他の係員にそれを教えるようになった。清華大学というエリート意識ゆえだけでなく、オリンピックを現場で支える一員として働いたことによって人間が磨かれたと感じた。閉会式が終わり深夜に内輪の打ち上げ会に

集まった彼らの笑顔を見て私は本当に嬉しかった。

ショックとメディア

北京オリンピックでボランティアの学生たちが一番驚いたのは外国メディアの取材のやり方だった。中国では、国や政府に対する批判が自由にできるわけではない。「領導」と呼ばれる指導者層の言うことには黙って従うのが掟であり、人々はそれが万国共通のルールだと信じてきた。実際には外国人記者はストレートに質問する。「組織委員会の約束違反ではないか、見解を聞かせろ」というような発言が、北京市や組織委員会の幹部に対して記者会見で飛び出す。会見室の人の整理などのためにその場にいるボランティアの学生たちは、「幹部や要人に対して単刀直入にものを尋ねてもいいのか」と非常にショックを受けた様子だった。

中国ではメディアの活動は、原則は全て禁止で許可されたものだけを取材するというのが実情だ。街頭で撮影しようとして警官に制止されるのは当たり前だし、軍事施設を撮影したとして逮捕者も出ている。そのようなトラブルがオリンピックのひと月前から毎日のように起きていた。またインターネットの監視も厳しく、２００８年４月に行われたＩＯＣ調整委員会では、ＩＯＣがインターネット閲覧の自由化を北京組織委に対し正式に要求した。温厚なＩＯＣのフェリ統括部長が会議で珍しく声を荒げたのを覚えている。

春と5億人

インターネット検閲システムは、中国政府に敵対的とみなしたページに閲覧規制をかけるものである。例えば英国放送協会（ＢＢＣ）のニュースサイトには数年間アクセスができなかったが、２００８年から英語版だけが何の前触れもなしに見られるようになった。ＢＢＣはオリンピック・メディアの有力な

一員だけに中国政府も妥協せざるを得なかったのだろう。まだ見られないサイトは他にも沢山あったが、オリンピックに向けて規制緩和は確実に進んだ。

そしてオリンピックの大会期間中は世界各国の記者から苦情が来ないように、中国政府はインターネット規制をさらに緩め、ＩＢＣやＭＰＣで働いた中国人学生は、普段見られない外国のサイトを閲覧できる結果となった。彼らは暇さえあれば夢中で世界のニュースを読み音楽を聞いていた。

ただ、「メディアの春」はここまでだった。オリンピックが終わったとたんにネット規制が復活した。外国のソーシャルメディアも次々接続できなくなり、YouTubeは２００９年3月に、次にフェイスブックが切断された。ツイッターも接続できなくなった。しかしながら「上有政策、下有対策」（上に政策があるなら、下には対策がある）としぶといのが中国人だ。切られた外国のＳＮＳの代わりに作られたのが「微博（ウェイボー）」という、いわば中国版ツイッターだった。中国語は漢字だけなので微博の１２０字程度でも日本語にすれば４００字分くらいの内容を書くことができる。微博は急成長し3年後には使用者が5億人に達した。

２０１１年に浙江省の温州で高速鉄道の大事故があったが、中国の国営テレビやメディアはこういう政府の面子が潰れるニュースは報道しない。しかし微博を通じて事故の写真が拡散し、新幹線型の車両が高架橋から落ちる大惨事があったことを多くの中国人が知ることになった。

10年と10万人

オリンピックが終わり10年近く経つ今でも中国政府はメディア規制に躍起になっている。国家機密の開示規制が強化され、記者が所属団体の事前承認を得ずに批判報道することも禁じられた。２０１７年からはＶＰＮという、多くの外国企業が使っている仮想専用回線の仕組みまで規制された。この仮想回

線を使って中国人が政府に対する不満を外国のSNSなどに書き込むことを恐れたのだ。

このような規制は繰り返し出されながらも効果を上げていない。その背景は北京オリンピックの時の学生ボランティアの経験に端を発していると私は考えている。外国人の行動様式や自由なものの考え方に多少なりとも影響された10万人ものボランティアの経験が国民全体に広がったのではないだろうか。鉄道事故の場合にも当然の「知る権利」として情報を広めてしまったのではないだろうか。オリンピック当時22歳だった清華大学の学生は今は30歳を越え党や政府の中級幹部くらいになっているはずだ。知る権利や発言の自由をめぐる彼らの意識はその上の世代とは全く違っている。中国では北京オリンピックが発想の大きな転換点になり、言論についての考え方の異なる世代を生んだのだと思う。

オリンピックのレガシーとは競技施設や技術革新という形のあるものだけではない。若者に発想の転換をもたらし社会の形を変える原動力となった精神的なものを最大のレガシーと呼びたいと私は思っている。（２０１７年度執筆）

付記

本稿は、（公財）笹川スポーツ財団刊行「スポーツ歴史の検証　オリンピック・パラリンピックのレガシー」（２０１８年３月27日発行）より再録させていただきました。

社会貢献とボランティア

ボランティアを歴史的に考える

菊　幸一

取材　西本 祥子
長田 渚左

菊 幸一（きく・こういち） 1957（昭32）年、富山県生まれ。87年3月、筑波大学大学院博士課程単位取得退学。88年3月、教育学博士（筑波大）。現在、筑波大学体育系教授。日本体育学会理事、体育社会学専門領域代表。93年に日本体育学会奨励賞受賞。04年と14年に秩父宮記念スポーツ医・科学賞奨励賞受賞（14年は研究代表）。主な編著書に「現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか」（編著、ミネルヴァ書房）、「21世紀のスポーツ社会学」（共著、創文企画）「よくわかるスポーツ文化論」（共編著、ミネルヴァ書房）「スポーツ政策論」（共編著、成文堂）など多数。

ボランティアという言葉が、日本で一般的になったのは、１９９５年の阪神・淡路大震災からと見られています。百万人を超える人々が全国各地から活動に行ったことが、連日テレビのニュースなどで伝えられました。その２年後、97年１月「ナホトカ号重油流出事故」が起き、厳寒の北陸で重油回収の作業をする人々の中に沢山のボランティアがいて、メディアで大きく取り上げられました。

ボランティアという概念そのものは昔からさまざまな国にありました。そのタイプは２つあり、１つは村社会、自分の近くで困っている人がいたら助けてあげる互助精神、味噌や醤油の貸し借りに始まり、生きていかれないような大きな事象が起きてしまった時に周囲が手を差しのべるボトムアップ型。もう１つは、地元の名士や顔役、長が集落の人々の世話やめんどうをみる上から下へのトップダウン型です。これらは古代からの人々の生きる知恵だったとも言えます。

現代社会でボランティアを考える時に、見返りを期待する〝ギブ＆テイク〟を思い浮かべる人が多いようですが、基本の考え方は〝純粋贈与〟なのです。

歴史と背景

その考え方の背景には、近代のヨーロッパ、特にイギリスですが、階級制度がありました。まず、何代にも続いて広大な土地を所有し、名門といわれる上流階級の貴族やジェントリー（男爵の下に位置する下級地主層）がいました。その下に位置するのは産業資本家、いわゆる成り金で富を築いた中流階級です。その中流階級は莫大なお金は獲得したが、自分たちにないのは、自分たちの歴史だ、と考えます。彼らには歴史と伝統のある上流階級への強い憧れがあり、自分たちは上流階級にはなりたくてもなれないという思いから、上流階級をモデルとして品位やマナーを高め、社会に貢献することに力を注ぎます。

自分の〝出自〟や家のヒストリーは簡単には作り

上げられないので、自分たちが世の中から認められ上流階級に少しでも近づこうとして寄付や慈善活動を行うことを自らの〝義務〟として課すわけです。

現代社会では企業や会社が利益を上げたら儲けるばかりでなく社会へ貢献することにも熱心になってゆき、それを自分たちの義務だと考えていますね。最近の例では、巨万の富を得た米国の実業家、マイクロソフトを創業したビル・ゲイツが財団を作ったりしてましたよね。

清貧と高見

話は少しそれますが、実は以前に、イギリスで今は数が少なくなっている上流階級の人を捜したことがあります。何代も続く上流階級の人が何を考え、どんな生活をしているのか？　知りたいと考えたのです。周囲の人々から複数の推薦のあった高貴な方を訪ねましたが、実際に会ってみるとご本人は「自分は上位の中流階級（アッパー・ミドル）に過ぎない」と身分を否定しました。つまり本物の上流階級の人は表には出てこない。勿論そういう人たちは今も先祖代々からの寄付行為を続け社会貢献活動を継続しているのに、ひっそりと人目につかない所で自分の食べる分だけの農作物を作って静かな生活を送っているようなのです。つまり清貧生活です。世俗から離れ、自分への見返りなど期待していない、宗教とは別に静かな精神の高見までゆくことを目指しているのでしょう。聖なるもの、言わば、sanctuary恩寵の世界で、いずれは神に自分は祝福されたい……と思っているのだと思います。

地位や身分に伴う自発的な義務を持つライフスタイルを〝ノブレス・オブリージュ〟と呼びます。つまり今は表に出てこない清貧生活を送る上流階級の人々は深くノブレス・オブリージュを理解して突き詰め、さらに昇華させて生きていると言えるかもしれません。

無縁と無理

翻って、日本にそのような精神は存在するのか？日本では江戸時代まで貴族（公家・摂関家等）は存在していましたが、明治維新によって天皇（皇族）だけが東京にお越しになり、貴族は京都に残りました。貴族の思想や考え方の中に、もしノブレス・オブリージュのようなものがあったとしてもこのような距離がある状況では民へ繋ぐことはなかったでしょうね。

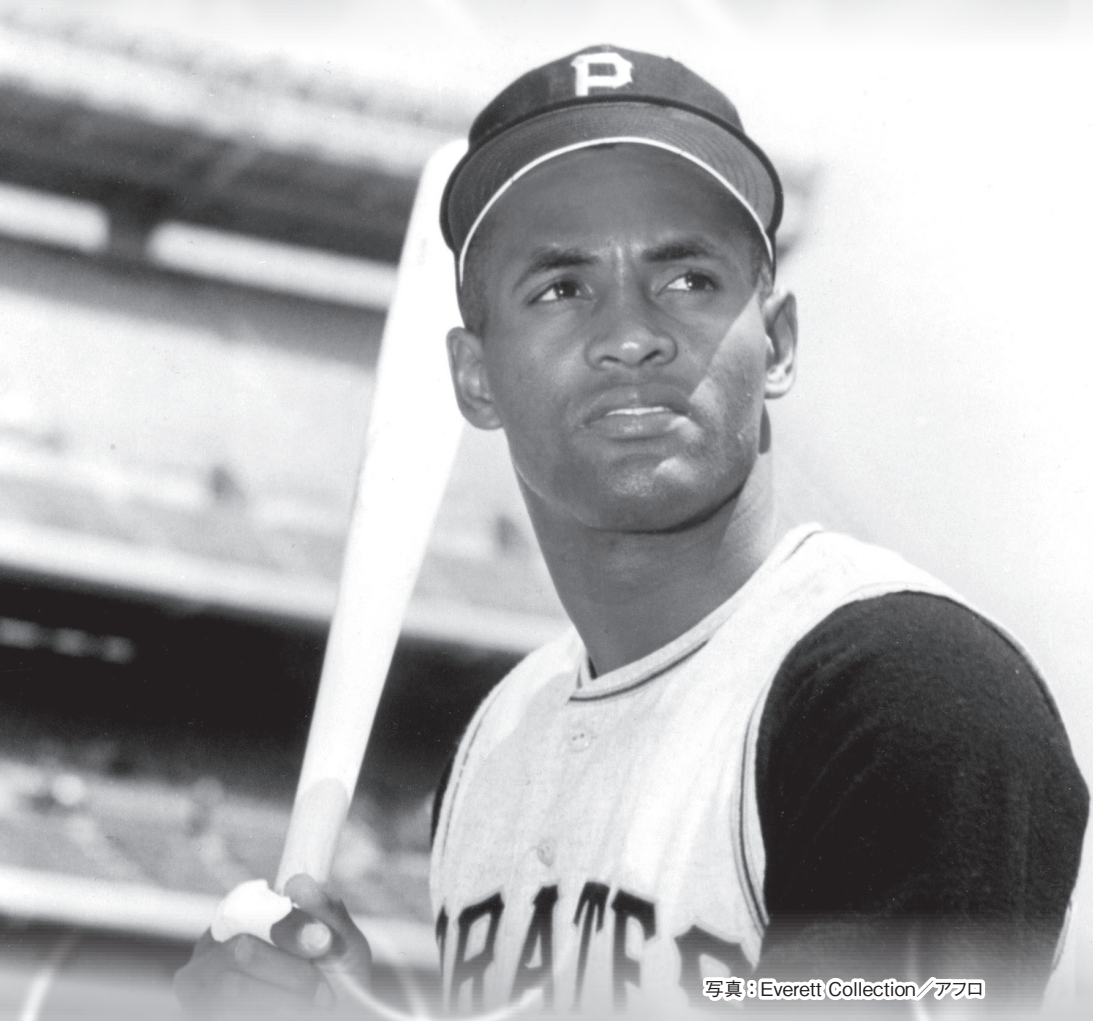
今年は明治元年から数えて１５０年、時代は平安→江戸→明治に移ったわけですが、明治維新を行った人たちは身分の高くなかった士族であり、彼らは出世欲が強く、下克上で上に這い上がった人たちですから、ノブレス・オブリージュというような考え方とは無縁だったでしょう。１８９９年に新渡戸稲造が海外で英文で『武士道』を発刊し、それ以降、武士道を英語に訳す場合にノブレス・オブリージュと訳されることがあります。士族のスピリットを何に置き換えるか？　で、当てはめたのでしょうが、その歴史的出自にもとづくクオリティーが違うので無理がある。残念ながら地位や身分に伴う義務を潔く果たそうとするノブレス・オブリージュは、日本ではまだ根付いているとはいえないのではないでしょうか。

ボランティアの語源にはボランタリズム(voluntarism）があって、これは自主的という意味より深く、内発的に自ら進んでするという意味があり、それが時間をかけて洗練されていくと社会的使命を帯びた義務の意識にまで昇華されていくということでしょう。重ねて言いますが、ボランティアの精神は〝純粋贈与〟であって、〝ギブ＆テイク〟ではないのです。ボランタリズムとノブレス・オブリージュには重なり合う点があります。

社会貢献とボランティア

「ロベルト・クレメンテ賞」を知っていますか?

川本 凜太郎



写真：Everett Collection／アフロ

今や大リーグと日本球界は、地続きのようだ。今季はア・リーグの最優秀新人に大谷翔平選手が選出され、来季には菊池雄星投手も海を渡る予定だ。日本選手の活躍は眩しいばかりだが、本場大リーグで、実績とともに語り継がれている精神も忘れないで欲しい……。

決戦前の高揚した会場が、その時だけ厳粛な空気に変わった。２０１０年10月28日、米国サンフランシスコで行われたジャイアンツ対レンジャーズの大リーグのワールドシリーズ第2戦。試合に先立ち『ロベルト・クレメンテ賞』の授賞式が行われた。この年の受賞者はレッドソックスのティム・ウェイクフィールド投手。同シーズン4勝10敗に終わった44歳に、大観衆は敬意を込めて、総立ちで拍手を送った。

『ロベルト・クレメンテ賞』は、地域活動を通じて社会貢献をした選手に贈られる。大リーグではＭＶＰ（最優秀選手賞）やサイ・ヤング賞（最優秀投手賞）以上に栄誉ある賞と言われている。ウェイクフィールドは1億円以上の自費を投じ、レッドソックスの本拠地ニューイングランド地方の子供たちへの支援をはじめとした社会貢献活動を10年以上も続けてきた。授賞式後、彼はこう言った。

「ロベルト・クレメンテはアスリートがフィールドの外で何をすべきか、ということを伝統として残してくれた。受賞は自分にとって最高の誇りになる」

名選手と大みそか

プエルトリコ出身のロベルト・クレメンテは『カリブの星』と呼ばれ、現在大リーグの約3割を占める中米出身選手の先駆けとなった黒人選手だった。１９５５年から72年までの18年間、ピッツバーグ・パイレーツ一筋でプレーした。首位打者4回、ＭＶＰ1回、オールスター12回出場、通算３０００本安打、２４０本塁打など数々の記録を残した。右翼手としても『ライフル・アーム』といわれた強肩で、ゴールドグラブ賞12年連続受賞は今でも外野手の最多記録として残る。

その大リーグ史に残る名選手が、時代を超えて尊敬される『伝説の英雄』になったのは、72年の大みそかだった。

この年、38歳の彼は9月30日のメッツとの最終戦

で二塁打を放ち、通算３０００本安打を達成してシーズンを終えた。しかし、皮肉にも彼の栄光の野球人生は、このメモリアルゲームで幕を下ろすことになる。

行動と決意

同年12月23日、ニカラグアの首都マナグアでマグニチュード6・2の大地震が起きた。以前から出身地の中米へのボランティア活動に取り組んでいたクレメンテの行動は早かった。翌24日には母国プエルトリコと米国でチャリティーを呼び掛け、集まった救援物資や医薬品を船で被災地に輸送した。ところが、送ったはずの積み荷は、被災者のもとにきちんと届いていなかった。一部の政府高官や軍によって横流しされ、闇市で売りさばかれていたのだ。事実を知ったクレメンテは、自らの手で救援物資を現地に届けることを決意した。

チームメイトたちが家族とともに、お祭り気分で新年を迎えようとしていた12月31日、クレメンテはプエルトリコの首都サンファンの空港から自らチャーターした飛行機で、被災地へ向けて飛び立った。しかし、積み荷制限をはるかに超える救援物資と医療機器を満載したプロペラ機は、離陸直後に傾き、そのままカリブ海に墜落した。荷崩れを起こした飛行機がバランスを崩したことが原因といわれている。数日間に及ぶ捜索で見つかったのはパイロットの遺体だけだった。

クレメンテの悲劇的な、そして崇高な最期は、国境や人種の壁を越えて、人々の心を動かした。翌73年、当時のニクソン米大統領はクレメンテの遺志をくみ、恵まれない子供たちへの財団設立を呼び掛けた。同年3月には、原則として引退後5年経過しなければ認められない大リーグ殿堂入りが、圧倒的多数で決まった。パイレーツは4月6日の開幕戦を追悼試合とし、クレメンテの背番号21を永久欠番にす

ることを発表した。そして、大リーグ機構は社会貢献活動に尽力した選手を表彰していた『コミッショナー賞』の名称を『ロベルト・クレメンテ賞』にあらためた。

これを契機に大リーガーたちの社会貢献活動への意識が一気に高まった。『ロベルト・クレメンテ賞』は、選手たちにとって『崇高な精神』の証しとして、MVP以上の大きな目標になった。過去の受賞者のリストを見ると、世代を超えたオールスター戦ができそうなほど、偉大な選手の名前が並んでいる。ピート・ローズ（76年）、カル・リプケン・ジュニア（92年）、カービー・パケット（96年）、サミー・ソーサ（98年）、カルロス・デルガド（06年）、デレク・ジーター（09年）。

遺産と意識

死後40年近くたった今も、クレメンテの精神は光を失うことなく、時代を超えて世界中で受け継がれている。いまだに多くの中米出身の大リーガーたちが『背番号21』を崇拝している。ドミニカ出身のサミー・ソーサも、プエルトリコ出身のカルロス・デルガドも、それぞれのチームで21番を背負い、母国への支援を続けた。06年にロベルト・クレメンテ賞を受賞したデルガドは言う。

「プエルトリコに生まれた子供は誰でも背番号21を付けてプレーしたがるものなんだ。僕らは社会に恩返しする義務がある。そのことをクレメンテは遺産として教えてくれた」

01年、ニューヨークを同時多発テロが襲った。前代未聞の悲劇に、大リーガーの行動は素早かった。地元メッツの選手たちがボランティア活動に参加。大リーグ選手会はリーグと約10億円を出し合い、救援基金を設立した。同年、パイレーツは開場したPNCパークの右翼フェンスの高さを、クレメンテの背番号にちなみ、21フィート（約6・4m）にした。

近年、日本のプロ野球選手にも、社会貢献活動への機運が高まっている。99年にはロベルト・クレメンテ賞の日本版『ゴールデンスピリット賞』が創設された。第1回は少年のいじめ防止キャンペーンなどに尽力した松井秀喜（当時巨人）が受賞した。06年にパイレーツに移籍した桑田真澄は、チームを選んだ理由についてこう語った。

「重要だったのは、昔から自分の中で大切にしている選手（クレメンテ）がプレーしていた球団だったこと。そこにすごくひかれた」

カリブ海に散ったクレメンテの精神は、はるか太平洋を超えて世界中に広がっている。

クレメンテが残した有名な言葉を紹介して、最後にしたい。

「もし物事をよくする機会があるのに、それをしなかったら、人生を無駄にしていることになる」

——ロベルト・クレメンテ

（※第14号（2010年）に掲載した原稿の再録です）

日本のアスリートの社会貢献

王貞治・小笠原満男・高橋尚子・長谷部誠

波多野 圭吾

写真：フォート・キシモト

※本稿は、スポーツゴジラ第14号（2010年）に掲載した原稿に加筆・修正いたしました。

アスリートによる社会貢献やチャリティーと聞くと、欧米のアスリートが行うものという印象があるかもしれませんが、近年は日本人アスリートも積極的に取り組んでいます。

例えば、サッカーの日本代表キャプテンとして長く活躍した長谷部誠選手は、２００７年から公共ＣＭに出演したり、自身のホームページで寄付を募ったりするなどしてユニセフ（国際連合児童基金）の活動を支援しています。２０１６年からはユニセフ親善大使の国内大使にあたる「日本ユニセフ協会大使」を務め、東日本大震災や熊本地震の被災地、ギリシャの難民キャンプなどの訪問を通じて、国内外で厳しい状況に置かれた子どもたちへの支援を呼びかけています。

また、日本プロ野球機構は、２００８年から試合時間を短縮することで照明エネルギーやCO_2（二酸化炭素）の削減を目指す「NPB Green Baseball Project」に取り組んでいます。選手たちはテンポのいい試合運びを意識するだけでなく、グリーンのリストバンドを装着して温暖化防止のＰＲに努めています。

こうしたアスリートによる社会貢献活動は、近年増加の傾向にあります。「Ｊリーグ選手等ホームタウン活動調査」によれば、選手一人あたりの年間平均活動回数はかつては６・０回（２００６年）でしたが、近年は13・３回（２０１５年）と倍以上に増えています。また、選手、監督・コーチによる年間活動回数の総数は３４９１回（２０１５年）にも及び、Ｊリーグのクラブは平均して週に１・７回、ホームタウンに選手や監督・コーチを送り出している計算になります（※１）。こうした取り組みはＪリーグに限ったものではなく、日本のスポーツ界全体に見られるものです。

それぞれの競技で結果を残すことが第一に求められるアスリートたちは、なぜこうも社会貢献に励むのでしょうか。それにはいくつかの理由が考えられ

ます。そこで、本稿では3人のアスリートによる社会貢献の実践例をあげ、アスリートがどのような理由や思いのもとで社会貢献に取り組んでいるのかを紹介していきます。

王さんと手紙

読売ジャイアンツの中心選手として現役通算868本の本塁打を記録した王貞治さんは、1960年から1988年までの約30年間、ジャイアンツが札幌市に遠征する度に市内にある養護学校を訪れていました。

訪問のきっかけは養護学校で働く職員からの一通の手紙でした。普段から子どもたちと一緒にラジオでジャイアンツの試合を聞いていた職員が、「選手に会ってみたい」という子どもたちの願いを叶えようと、王さんに養護学校に一度来てもらえないだろうかという内容の手紙を書きました。すると、王さんからすぐに「僕に出来ます事なら何んでもやらせて戴きます。（原文ママ）」と返事があり、その年から訪問が始まりました（※2）。この時、王さんはまだ入団2年目で二十歳です。一本足打法の習得前で、チーム内の熾烈なレギュラー争いの中にありましたが、練習や試合の合間を縫って養護学校を訪れていました。また、キャリアの最盛期にあっても、それまでと変わらないペースで学校を訪れています。

この訪問が学校に通う子どもたちを勇気づけたのは言うまでもありません。しかしながら、子どもたちだけではなく、王さんにとってもこうした活動が自らの現役生活の生きがいになっていたといいます。こうしたことは、王さんが最初に養護学校へ宛てた手紙の中の「僕等も色々と地方へ行く機会が多くその土地でよく整肢学園等へ寄らしていただいているのですが行く度に人一倍健康で野球を職業と出来る事がどんなにか恵まれているかと思うのです。（中略）行く事がそれ程皆さんに喜んでいただけるのなら僕等も行きがいがあります」（※2）という記述や、

後にこの訪問を振り返って「子どもたちに野球を通して、夢や希望を少しでも伝えることができるように頑張れたのは本当に良かった」と語っていることからも分かります。

また、王さんは現役を引退するまでサインを断ったことがないと言われていますし、監督になってからも選手にファンサービスを積極的に行うよう指導していたといいます。プロとしての意識を常に持ち、ファンを大切にすることの重要さを、王さんはこの訪問から学んだのかもしれません。

王さんがジャイアンツの監督を退いた後、この訪問は吉村禎章さん（当時選手、現ジャイアンツ打撃総合コーチ）へと引き継がれ、今も続いています。一通の手紙から始まった王さんと養護学校の交流は、その担い手を代えながら、気がつけば半世紀以上も続くものとなり、多くの子どもを勇気づけています。２０１８年には、長期にわたる取り組みが評価され、ゴールデンスピリット賞特別賞を受賞しました。

プロと自覚

Ｊリーグの鹿島アントラーズでプレーする小笠原満男選手は、２０１１年に自身と同じ東北出身のサッカー選手である柴崎岳選手や今野泰幸選手らとともに「東北人魂を持つＪ選手の会」を発足させ、東日本大震災で甚大な被害を受けた東北地方のサッカーの支援に努めています。２０１７年には各所からの寄付金や援助、協力のもと、震災でスポーツをする場所を失ってしまった岩手県大船渡市内に、全面人工芝のサッカーグラウンドをオープンさせました。

小笠原選手は大船渡高校の出身で、親族が岩手県に住んでいることもあり、震災の発生直後から自主的に大船渡や陸前高田などの避難所を回って支援物資や食糧を届けていました。家族や家を失って悲しみに打ちひしがれているはずなのに、避難している人からかけられる言葉は「いつも見ているよ」「次の試合も頑張って」とサッカーのことばかり。小笠

原選手は改めてサッカーが持つ力の大きさを理解し、自分がサッカー選手でいられることに感謝するようになったといいます。「今後はサポーターだけでなく、東北に住む人々のためにもプレーしよう」、「この人たちを、サッカーを通じて喜ばせてあげたい」、そう心の底から思うようになりました（※3）。小笠原選手もまた王さんと同様に、ボランティアに取り組む中でプロ選手としての自覚を強めていったのです。

友情と競争

元マラソン選手でシドニー五輪金メダリストの高橋尚子さんは、現役引退後の２００９年から、日本の子どもの不要シューズをケニアの子どもたちへ贈る「スマイルアフリカプロジェクト」に参加しています。裸足に近い生活をしているケニアの子どもたちに靴を贈り、誰もが笑顔で走ることができる環境を整えることがこのプログラムのミッションです。

現役を引退してからの高橋さんは、これからの自分に何ができるのか、全くイメージすることができませんでした。現役中はマラソンだけに集中し、練習や試合に忙しい毎日を過ごしてきたからです。周囲の関係者と話し合いを続け、陸上競技の普及、市民マラソンへの参加、環境・慈善活動の三項目を今後の活動の中心としていくことにしました。そうしたことを考え始めていたときに、ある人物からスマイルアフリカプロジェクトの企画を聞き、参加を即決したといいます（※4）。

高橋さんがこのプロジェクトへの参加を即決したことと、現役時代にケニア人選手と競い合ってきたことは決して無関係ではありません。ケニアをはじめとしたアフリカの国の中には、スポーツをするだけの経済的余裕を持たないところも少なくありません。そうした環境にあるケニア人選手と競い合う中で自分自身が成長できたことや、友情のようなものを感じていたこともあり、一人でも多くの子どもに

走ってもらえるよう、走るための環境を整えてあげたいと考えたのです。

また高橋さんは、このプロジェクトと並行して日本全国でランニング教室も行っています。金メダリストとしての経験を次世代に伝えるだけでなく、陸上競技の普及も視野に入れての活動です。この活動は、高橋さん自身がかつて実業団の選手から受けた指導に大きな影響を受けたことに起因しています。「あの時の実業団選手のように、今度は自分が誰かの役に立てたら」と考えています。

高橋さんは、こうした活動に取り組むことで今まで自分が受けてきた恩を社会に還していきたいと考え、それが自分自身を輝かせてくれるものだとも語っています。ともすればバーンアウト（燃え尽き症候群）に陥りかねない輝かしいキャリアを持ちながら、スムーズに引退後の生活を送ることができているのは、こうした活動が生きがいになったといえるかもしれません。

これまでのアスリートの中には、引退後の生活に生きがいを見出せず苦しむ者も少なくありませんでした。しかし本稿で紹介した選手のように、今日では社会貢献を生きがいにするアスリートが数多く見られます。つまり、日本のアスリートも社会貢献活動が実は自らのキャリアを豊かにしてくれるということに気がつき始めたということでしょう。こうした活動の積み重ねは、スポーツ文化の一番の担い手であるアスリートの社会的評価にもつながるものです。「たかがスポーツ」ではなく「されどスポーツ」という評価を得るためには、こうした取り組みが大きいと思われます。

【参考資料】

※1『J.LEAGUE NEWS Vol.148・Vol.241』Jリーグ .jp「J.LEAGUE Library」https://jlib.j-league.or.jp/
※2『王貞治』王貞治 ぶんか社 2010年
※3『蹴球魂＋1 ゴールデンワード2011特別編 小笠原満男 東北人魂』講談社「モーニング」ホームページ http://morningmanga.com/giantkilling_ogasawara/page_1.html
※4『シューズとアフリカと500日』高橋尚子 木楽舎 2010年

猪谷 千春（いがや・ちはる）　1931（昭6）年5月20日、北海道国後島に生まれる。父六合雄（くにお）は日本スキー界の草分け、母サダ（定子）は日本初の女子スキージャンパーと言われる。両親に英才教育を受け、「神童」と呼ばれ、都立大泉高校に通っていた1952年、オスロ冬季五輪アルペン競技出場。回転11位、大回転20位、滑降24位。53年、米国ダートマス大学入学。56年、コルチナ・ダンペッツオ冬季五輪回転銀メダル。57年、ダートマス大卒業。59年、バドガシュタイン世界選手権回転銅メダル。59年、米国の保険会社AIU入社。60年、スコーバレー冬季五輪出場。61年、AIU日本支社傷害保険部初代部長就任。78年、アメリカンホーム保険社長就任。82年、IOC委員就任。88年、紫綬褒章受章。93年、日本オリンピック・アカデミー会長就任。94年、日本トライアスロン連合初代会長就任。2003年、日本オリンピアンズ協会初代副会長就任。05年、IOC副会長就任。06年、ダートマス大名誉博士号授与。11年、日本体育大学名誉博士号授与。12年、IOC委員を退任し同名誉委員に。オリピックオーダー銀章受章。17年、東京都名誉都民。

日本の歴代ＩＯＣ委員の中で、私は11代目です。1番が嘉納治五郎先生。９番目が竹田恒徳さんで、今の天皇陛下の叔父様に当たる方ですが、竹田さんがＩＯＣ委員を退任される時に、次はぜひ私にということでご推薦いただき、図らずも大変名誉なポジションをいただくことになりました。

私の次にＩＯＣ委員になったのがサッカーの岡野俊一郎君でした。私と同じ１９３１年、昭和６年の生まれで、残念ながら昨年他界されましたけれども、二人でオリンピック運動精神のために頑張った仲間です。

13代目が竹田恆和さん。現ＪＯＣ会長です。お父様が９代目の竹田恒徳さんです。現在のＩＯＣ委員の定年は70歳で、竹田恆和さんは昨年定年を迎えられましたが、東京オリンピックがあるために2年間任期が延長され、２０２０年までＩＯＣ委員として活躍していただきます。それから大変嬉しいことにこの10月、ブエノスアイレスで行われたＩＯＣ総会で、世界体操連盟会長の渡辺守成さんが新しいＩＯＣ委員に任命されました。

私は２０１２年に80歳の定年でＩＯＣ委員を退任し、今は名誉委員です。名誉委員が現役の委員と違うのは、オリンピックでメダルを授与することができない、総会の投票権がないという2点だけで、それ以外は同じ扱いを受けております。

スポーツの平和運動への貢献を国連にアピール。「オリンピック停戦」が採択される。

続いてオリンピックと平和運動について話をさせていただきます。

１９７９年、当時のソ連がアフガニスタンに侵攻しました。米国のカーター大統領は抗議行動の一環として翌80年開催のモスクワオリンピックの不参加を決め、西側諸国にも支持を促しました。当時ＩＯＣ委員だった竹田恒徳、清川正二両委員は不参加はオリンピックの趣旨に反するとして参加の方向で積極的に努力されましたが、日本政府の決定を覆すま

でには至らず、不本意ながら日本もボイコットせざるを得ませんでした。

4年後にロサンゼルスで開催されたオリンピックでは東側諸国が報復措置としてボイコット。2大会連続で片肺開催ということになり、オリンピック大会は存亡の危機にさらされました。

この事態に危機感を募らせたIOCは、ロサンゼルス大会直後に臨時総会を開催して3日間にわたって活発な議論をいたしましたが、出た結論は、スポーツは政治には勝てない。オリンピック運動は、選手や若者たちを戦火から守るためにベストを尽くすという、残念ながら誠に悲観的なものでした。

しかしIOCはその後もあきらめず国連に働きかけました。国連が意図する平和でより良い社会づくりにスポーツがいかに大きな貢献ができるか、アピールし続けてきました。

その活動の一環として1992年に提案した「オリンピック停戦」が、翌93年の第48回国連総会で採択されたのは、近代オリンピック史上画期的なことでした。その後2年ごとにオリンピック開催前年の国連年次総会でオリンピック停戦が採択されることになりました。

この決定を受けてIOCは早速「オリンピック休戦財団」を設立。私は当時のサマランチ会長に、財団の理事会に日本から一人入れて欲しい旨要請し、明石康前国連事務次長を推薦しました。明石さんには初代理事のお一人として、国連での貴重な経験を生かし、長きにわたりオリンピック停戦の発展のために大変大きな貢献をしていただきました。

朝鮮半島の平和実現への願いを込めて、平昌大会への合同チーム参加を認める。

IOCは引き続き国連とは良好な関係を保ち、2009年にはパーマネントオブザーバーの資格で国連に迎えられ、世界各国と緊密な関係を構築するのに絶好な場を獲得しました。

さらに16年には国連からスポーツの独立権と自治

権を認められ、翌17年にはさまざまな平和運動の中でスポーツを通しての運動、すなわちオリンピック運動が最も効果的であると評価され、国連内機関のひとつであるＵＮＯＳＤＰ(Unired Nations Office on Sport for Development and Peace) を閉鎖し、代わってその活動をＩＯＣに託されました。

ＩＯＣは今年の2月に開催した平昌冬季大会で、申込期限を過ぎてから韓国との合同チームで参加を求めてきた北朝鮮に対し、朝鮮半島に平和をもたらす第一歩となればとの思いを込めて、特例を設けて参加を認めました。このことが発端となってその後歴史的な米朝会談が実現しました。

２０２０年東京オリンピックには南北合同チームでの参加の希望が伝えられていますし、さらに32年のオリンピック夏季大会の南北共同開催のシナリオがあるとも聞いています。ＩＯＣは今後も両国の指導者と積極的に接触をはかり、スポーツを通して朝鮮半島に平和を取り戻せるよう最大限の努力を続けてまいります。

かつてスポーツは政治と一線を画すべきだと言われてきましたが、今は政治といかにうまくつきあってスポーツを発展させるかの時代に変わったことはご承知の通りです。

世界が平和でないとスポーツはできないとよく言われます。確かにその通りです。しかし私は平和な世界をつくるのはスポーツであるというぐらいにスポーツの役割を強調したいと考えています。そのくらい今、平和運動とスポーツは密接なつながりを持つようになりました。

オリンピック大会の開催を継続するために開催都市への負担軽減が喫緊の課題。

近年ＩＯＣが直面している最大の問題は、オリンピック開催希望都市の数が年々減っていることです。

１９７６年のモントリオール大会では、世界的に労働組合の活動が激化し、加えてインフレによる建築資材の高騰から開催経費が予算を大幅に上回って

市の財政に大きな負担となり、モントリオール市民は大会終了後四分の一世紀にわたって増税の負担を強いられました。

84年の大会にはロサンゼルスの他に実行希望都市があらわれず、唯一残ったロサンゼルスも住民投票の結果、市の税金に1セントたりとも手をつけないという条件のもとにかろうじて開催にこぎつけたのでした。

旅行会社の経営者からロサンゼルス大会組織委員会に就任したピーター・ユベロス氏はＩＯＣを説得し、競技場にファストフードのマクドナルドの冠と五輪のシンボルマークをつけることを条件に新しい競技場をつくらせたり、一業種一社に絞って大企業の広告に五輪マークを独占的に使用させることを条件に巨額の使用料を請求して多額の収入を上げました。ロサンゼルス市民に1セントの負担もかけないばかりか、何と2億1500万ドルという莫大な利益を上げることに成功して世界にオリンピックは儲かるという神話を生み出し、一時は十数都市が開催希望都市として手を挙げる結果となりました。

それから40年たった現在、さまざまな社会環境の変化もあってオリンピック開催費用がまたまた高騰。ロサンゼルス方式を採用しても充分な資金が集められず、開催都市や国の財政に頼らざるを得なくなりました。国民や市民の間からはオリンピックを開催するよりその資金をもっと国民のため市民のために有効利用すべきであるという声が上がるようになり、開催希望都市の数が減り続けています。

２０２６年冬季オリンピックについては、10月のブエノスアイレスでのＩＯＣ総会でストックホルム、ミラノ、カルガリーを正式な立候補都市として承認したのですが、その後カルガリーが市民投票の結果56％の反対で脱落。ストックホルムもいまだに市議会から正式な承認を得られておりません。またミラノも原則として国や市の財政には頼らなければ承認という含みのあるコメントを出しております。

オリンピック大会の開催費用をいかに低く抑えるか、あるいはいかにして開催費用に見合った収入を上げることができるか、解決方法を見出し提示することは、ＩＯＣに突きつけられた喫緊の課題です。平和な社会実現に向け貢献するためにも、オリンピック開催を半永久的に継続していく使命と責任をＩＯＣは背負っています。

１８９４年の創立以来、ＩＯＣは総力を挙げて幾多の難局を乗り越え１２４年の歴史を刻んできました。今回もまた必ずこの難局を乗り越え、世界の人々から今まで同様の支援と協力を取りつけられるオリンピック運動になるであろうと、私は疑いを持っておりません。

ＩＯＣ委員として誰よりも精力的に活動する。立候補都市を巡回する「調査委員会」設立に尽力。

１９８２年にＩＯＣ委員になるにあたって、私を推薦してくださった竹田恒徳さんのご恩義に応えるためにもできるだけのことをしようと決心して、すぐいろいろな委員会に所属しました。ＩＯＣ委員の中でも多数の委員会に積極的に顔を出していた数少ない一人であると自負しております。

当時ＩＯＣでは会長や理事会と一般の委員の間のコミュニケーションがうまく取れていないことに気がつき、サマランチ会長に進言して「オリンピックハイライツ」というウィークリーニュースを発行し、ＩＯＣ委員に配布しました。当時はＦＡＸ、今はインターネットで届けられています。もう30年以上続いています。

その次に私がいたしましたのは「調査委員会」の設立です。オリンピック開催を希望する都市が立候補した際に、ＩＯＣ委員のグループを派遣して、現地を調査して回ることを始めたのです。この調査委員会をつくった二人のうちの一人が私です。もう一人はスウェーデンのＩＯＣ委員で、彼は夏の大会の、私は冬の大会の委員会をつくりました。

ＩＯＣ委員になった時、私はまず会長になるのは

難しいだろうと思いました。スポーツの世界はやはりヨーロッパが中心です。ユーロセントリシティと申しますが、そこで東洋人が会長になることはまずないだろう。だけど副会長にはなれるかもしれないということで私は副会長になることを目標にいたしました。おかげさまで副会長も一期経験することができました。

ゼロベースで編み出した独自の滑走技術で欧州アルペンスキー界に衝撃を与える。

私の親父は日本のスキー界の草分けでした。お袋は私の生まれる前、つまり80年以上前に親父の感化を受けてスキーのジャンプをしていました。当時35mぐらい飛んでいて、ですから高梨沙羅ちゃんの大先輩にあたる、そういうお袋でした。この両親の間に生まれたので、好むと好まざるとにかかわらず、私は2歳9カ月でスキーを履かされました。

私の種目はスラローム、回転競技でした。当時のスキー技術では、左に曲がる時には左脚に乗り、右に曲がる時には右脚に乗るのが常識でした。私はわざと林やブッシュの中を滑ったり、ジャンプの練習を取り入れたり独自の練習をしておりましたが、曲がる方向と逆の脚に荷重した方が回転の後にスピードが落ちないことを発見し、この技術をマスターするように一生懸命練習しました。

他人の真似をしたのでは絶対その人に追いつくことができない、ましてや追い越すことはできない。相手を負かすには自分独自の技術を身につけなければならないというのが私の持論です。

ヨーロッパのレースに出場するようになると、当時最強だったトニー・ザイラーやモルテラーといったオーストリアの選手も、私がゼロベースで編み出したのと同じ技術で滑っておりました。当時はまだ終戦から間もなく、日本はバナナの獲れる国だというふうにヨーロッパの連中からは見られていましたから、私が彼らと同じ技術で滑っていたのに驚かれたようです。

練習しながら勉学に励み文武両道を実現。名門ダートマス大学を4年間で無事卒業する。

１９５３年に縁あってアメリカのダートマス大学に入学いたしました。アイヴィーリーグに所属する名門です。私を世話してくれた人が、どうせアメリカで勉強するんだったらスキーが強いだけでなく良い大学に入りなさいと選んでくれたのですが、実は入学してから、私は大きなミステイクを犯したことに気がつきました。

なぜならとにかく勉強に厳しい大学だったからです。期末試験で全科目の平均点が60点を下回ると次の1年間、５つの罰則を科せられます。デート禁止、車の所持禁止、キャンパス内の飲み会に参加してはいけない、休日にも帰省してはならない。そんな時間があったら勉強しなさいというわけです。

ここまでの４つはまあ良いのですが、５番目の学外の行事に参加してはならないというのは困ります。オリンピックに行けない、世界選手権に出られない、それどころか国内の大会にも出られない。その時ほど文武両道の両立が難しく思えたことはありません。

テキストブックを床の上に置いてその上で腕立て伏せを１００回、２００回やったり、テキストを読みながら空気椅子で脚を鍛えたりしていました。空気椅子は踵を上げないことで効果が上がるのですが、最初は1〜2分しかできませんでした。やっているうちに30分以上できるようになったのですが、面白いことにテキストに意識がいっているもので、脚の痛みが結構和らぐんですね。

アルペン競技は記憶力を非常に必要とします。私は教室では一切ノートを取らず、宿舎に帰った後その日のレクチャーを思い出しながらノートを取るようにして、記憶力のトレーニングをしました。

その結果、私は4年間で大学を卒業することができました。4年間のうち2年間は、日本人でありながら大学のチームのキャプテンを務めました。全米選手権は4年間守り通しました。そして大学3年生

の時にオリンピックで銀メダルを獲りました。口幅ったい言い方ですけども、この時私は世の中には不可能というものはないと、頭を使えば何でもできるということを学んだわけであります。

逆境に立ち向かう、あきらめない気持ちが、オリンピックの銀メダルにつながった。

コルチナ・ダンペッツオ・オリンピックの回転競技は1956年の1月31日でした。実は前の年の12月半ば、私は練習中に右足を捻挫して、とてもオリンピックに出られるような状態ではありませんでした。しかしとにかくまず足を完全に治すことに専念し、その後自分の力を最大限に持っていくことに集中した結果、オリンピックに間に合ったのです。

オリンピックでは2本目のスタート直後に失敗して大きくタイムをロスしました。しかしその後あきらめないで全力を尽くした結果、ザイラーには勝てませんでしたが銀メダルを獲ることができました。逆境に立ち向かう、最後まであきらめない気持ちがメダルにつながったのだと思います。

私はよく、あなたは幸運の星の下に生まれた人だと言われました。それを私は否定はしませんけれど、幸運の星は自分でつかみとるもの、日頃から研鑽して自分を磨いた人にこそ幸運をつかむチャンスがあるのだと思います。

本日は日本スポーツ学会から大変名誉ある賞を頂戴し、身に余る光栄であります。

自分はいつまでも若いと思っておりましたが、今年で87歳という末期高齢者クラブの会員です。今後も人生の賞味期限が切れるまで、あるいはもう切れているかもしれませんが、今日いただいた名誉ある賞にふさわしい研鑽と努力をしてまいりたいと思っています。

（本稿は2018年12月4日、東京都渋谷区のハクジュホールで行われた第9回日本スポーツ学会大賞受賞記念講演を再構成しました）

明石康 氏（元国連事務次長）の祝辞

本日は私が以前から親しくさせていただき、心から尊敬している猪谷千春さんが日本スポーツ学会大賞を受賞されると聞き、馳せ参じました。猪谷さんは1931年、昭和6年のお生まれです。実は私も同じ年に生まれました。私は1月生まれですから猪谷さんより多少兄貴に当たるんじゃないかと思います。

猪谷氏（左）に記念のトロフィーを渡す明石氏（右）

私は猪谷さんのご希望に従って、IOCのつくった「オリンピック休戦財団」の理事を10年ちょっとさせていただきました。財団でただ一人のアジアからの理事でしたので、日本を代表するだけでなくアジアを代表する気持ちで務めさせていただきました。

15年前に刊行された「スポーツ文化」という雑誌の創刊号の特集テーマは「オリンピックに未来はあるか？」でした。これには猪谷さん独自のお考えが書かれており、私は繰り返し読んで猪谷スポーツ哲学に触れることができました。フェアプレイとはどういうものか、スポーツマンシップとはどうあるべきか。猪谷さんの意見はある意味で厳しい、自己に妥協しない厳しさがあります。しかしこういう厳しさを持たないなら、スポーツもまたいろいろな意味で堕落する、邪道に陥ることがあり得ると考えます。今もこれからも、猪谷哲学の持つ意義は大変大きいと私は思っております。

夢劇場『馬』No.14

「二刀流」

オジュウチョウサン……という馬名を聞いたとき、なぜかオジョウチョウサンだと思い込んだ。『オジュウ』には『お嬢』、『チョウサン』は『蝶さん』を連想して、マダムバタフライの幼少期をイメージした馬名なのか？　と思った。

後日、馬のオーナーが長山（ながやま）さんという名字で、その音読み『チョウサン』と、オーナーの次男が自分のことを『俺』と言わず『オジュウ』と言っていたため、2つを合体させたと知った。

そういえば本誌『スポーツゴジラ』もかなりヘンテコな名前だと思われている。今も「ゴジラが縄跳びをしているのか？」「ゴジラはどんなスポーツを好むの？」などと聞かれることがある。

さて、そのオジュウチョウサンは人生、いや馬生も不思議な色彩を放っている。平場レースから障害に移り、中山グランドジャンプや中山大障害などの大レースを勝ち続けていたにもかかわらず、再び平場に戻って結果を出した。11月3日の南武特別では、3番手からゴール前で抜け出す正攻法で11連勝を飾った。当然、馬が自分の適性を判断して選択しているわけではない。馬を管理する人たちの見極めと柔軟な発想が成す、巧みの技なのだが……。

「今年は大リーグの大谷翔平選手など二刀流が脚光を浴びていますね」と馬好きのT氏に話すと、彼はこんな話をしてくれた。

「私の友人の子供ですが、2人兄弟で兄は現役で東大医学部に入った秀才でした。弟は指先が器用で車が好きだからと、自動車修理の道へ進み、すぐに工場主任にもなった。ところがある日、車ではなく、人間の修理をやりたいと言いだして勉強を始め、国立の医大に入った。今は整形外科医です。『ゴッドハンド』とまで言われています」

ヘーッ!?　1つのレールから異なるレールへ移る偉大な発想と意志。オジュウチョウサンにも劣らぬ自在性……人間界にも巧みはいる。

バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。

〒352―0011
埼玉県新座市野火止8―16―32
株式会社東美物流
『スポーツゴジラ』係

送料値上がりのためやむをえず変更しました。
10冊まで　送料　300円
20冊まで　送料　600円
40冊まで　送料1000円
※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】
http://sportsnetworkjapan.com/

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の春号42号は2019年3月中旬刊行を予定しています。ご期待ください。

また、バックナンバーは左記の図書館でもお読みになれます。ご利用ください。

●世田谷区八幡山・大宅壮一文庫
●世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館
●港区広尾・東京都立中央図書館
●千代田区永田町・国立国会図書館

【理事】
五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大学名誉教授）／伊藤順蔵（早稲田大学名誉教授）／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本体育・スポーツ政策学会会長）／佐久間舜二（ぴあ株式会社取締役）／重村一（㈱ニッポン放送会長）／永井憲一（法政大学名誉教授）／山口香（筑波大学教授）／山口良治（伏見工業高校ラグビー部総監督）

【事務局】
〒359―1192
埼玉県所沢市三ケ島2―579―15
早稲田大学スポーツ科学部 太田章研究室気付

皆様、ご存じでしたか？
『スポーツゴジラ』が置かれている都営地下鉄（大江戸線、浅草線、三田線、新宿線）では、ラジオのAM放送を聴くことが可能です。緊急時の情報収集などに役立ちます。

スポーツゴジラ®
2018年12月25日発行
第1巻第41号

無断転載を禁じます

企画編集　スポーツネットワークジャパン
長田渚左・川本凜太郎・阿部雄輔
波多野圭吾・西本祥子・江川卓美
平塚貴大・山内亮治・鈴木希人
制作　有限会社ナトリック
印刷・製本　図書印刷株式会社
発行　スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで
特定非営利活動法人
スポーツネットワークジャパン
〒168―0063
杉並区和泉1―40―13―401